

作文部門

☆総評☆

今年もすばらしい作品が全国から数多く寄せられました。日常生活にしっかりと目を向けて書かれた作品が多数見られたことが印象に残りました。

しかし、特に中学生の作品の中に、題材選びのうまさだけが目立ち、内容が伴っていないものもあり、残念でした。

自分の体験↓考察↓まとめ、の流れを考えて、バランス良く書くことが大切です。その上で、自分の感動を素直に表現したり、論理的な考察の中に温かさを加えたりすれば、作品がもっと輝いてきます。

文部大臣奨励賞

「あんま、じよんぶか？」

東京都星美学園小学校

三年 田村 彌佳



「あんま、じよんぶか？」
「あんだ、なんによりいいなあす。」

岩手にいる私のおじいちゃんとおばあちゃんは、人に会った時、いつもこう言ってあいさつをします。早口で、へんなくせがあるので、私には何を言っているのか、ぜんぜん分かりません。

今年の夏休みに、おじいちゃんの家遊びに行った時

も、

「じゃ、じよんぶか？」

「じよんぶがいず番いいなす。いがったなす。」

と、言いました。なすの話をしているみたいで、私にはやっぱり何を言っているのか、分かりませんでした。そんな私に、お父さんが小さな声で、
「元気にしていたかい。けんこうが一番いい事だ、よかったね。と、言っているんだよ。」

と、教えてくれました。

お母さんも、お父さんと、けっこんしてすぐのころは、おじいちゃんたちの言っている事が分からなくて、ニコニコわらって、「ハイ…ハイ…」と、返事ばかりしていたと言っていたけれど、本当にほうげんというのは外国語みたいで、さっぱり分かりません。あったかい気です。でも…なぜだか分からないけれど、あったかい気がします。

今までずーっと、おじいちゃんやおばあちゃんの言っている事が分からなかったけれど、ふしぎなあったかさがつたわってきて、心の中でお話していたのかもしれないと思いました。

そんなふしぎなほうげんを、今年はいっぱいおぼえて、おじいちゃんたちが何を言っているのか分かるようになりたいと思いました。あったか言葉をいっぱいおぼえて、岩手の色々な人たちと、ちゃんとお話できるようにになりたいと思いました。

それから私は、東京に帰るまで、毎日、おじいちゃんたちのそばにくっついて、色々なお話を聞いていました。

「あんま、じよんぶか。」…（おじいちゃん元気ですか。）

「あんだ、なんによりいいなあす。」…（そうですか。何よりも、いい事ですね。）

「ばあ、あのなはん。」…（おばあちゃん、あのね。）

注意して聞いていたら、三日目くらいから、少しずつ分

読書感想文部門

☆総評☆

質の高い作品がたくさん集まりましたが、中には作者の解説にそってまとめたものもありました。感想文ですから、自分の感動を大切にしてほしいと思います。すばらしい本との出会いが、よい感想をもつきっかけになります。改めて、本の選び方を見直してみましよう。そして、心をこめてじっくりと読みこんで書くようにしましょう。

また、書きっぱなしにするのではなく、必ず読み返して、誤字を直しましょう。

中学生のみなさんの力作を期待しています。

文部大臣奨励賞

「心のキャッチボール

——「わたしを置いていかないで」を読んで——

大阪府大阪教育大学教育学部附属

天王寺中学校

三年 松田 紫恵



「わたしを置いていかないで！」

これは、シルヴィと彼女の母の心からの叫び。父が、友人が、大切な人達が自分を裏切り遠くへ去っていつてしまふ。今まで信じていたものが目前で壊れ、足元から

かのようにになりました。

あなたの事を『おめえ』とか、自分の事を『おれ。』とか、男の人ばかりでなく女の人も言うので、わるい言葉を使って、いやだなーと思っていましたが、その言い方にも、ふわぁんとしたやさしさがあるのに気がつくしました。

私は、虫がきらいなので、虫のいっぱいいるいなかですきじゃなかったけれど、ほうげんが分かってきたら、クモやカマキリまで、

「おぼんでがんす。」…（こんばんは。）

「いいばんでなはん。」…（気持ちのいい夜ですね。）と、あいさつしているような気がして、いなかがだんだんすきになってきました。すきになってきたら、今まで気がつかなかった事がいっぱい分かってきました。空がとっても青い事。

お星さまが、いっぱいある事。

風が、いいにおいのする事。

花が、元気いっぱいさいている事。

電車の音がゴーツじゃなくて、ガタンコ、ガタンコって聞こえてくる事。

とくに、すごいと思った事は、オバケが出そうでさうだった夜が、こわくなくなった事です。そして色々な虫の声が聞こえて、ホタルが庭までとんで来て、ピカッピカッと光り、とってもきれいだっただけです。

近くに、ゆう園地もないし、大きなオモチャやさんもないけれど、

「じゃ、じよんぶか？」

「じよんぶが、なんによりいいなあす。」

と言う、まほうの言葉で、やさしい気持ちになれるいなか、私は大すきになりました。

音を立てて崩れていく。相手の肩を揺さぶり、屋根さえも吹き飛ばすほどの大声で叫びたくなる。「一人にしないで！ ずっと側に居て！ お願だから、わたしを置いていかないで！」

シルヴィの父は、アルツハイマー病だった。アルツハイマー病とは「脳の機能が低下し、言葉や時間の感覚が失われていく病気。治療薬はまだ発見されていない」とある。既に諦めきった母とは違い、彼女は最後まで父は正常であるという証拠を集め続け、その恐ろしい事実を認めることを拒んだ。「老化が始まったのかもしれないが、少し疲れているだけだ」と都合のよい解釈をしたかった。だがそう解釈できない事実が次々と明らかにになってしまふ。「真夜中に仕事に出かけようとする。」店で買い物にしても代金を支払わずに出てくる。など。とうとう彼女もこう事実をつきつけられては、父の病気について認めざるを得なくなった。ずっと父を信じていただけに、その悲しみや絶望は例えようもなく大きく、落ち込みもまた激しかった。

この物語は、シルヴィと彼女の母との性格の違いを明白に対比させている。その典型が病気が原因で父が不可能な行動をとった時の対応の違いに表れる。常に冷静なシルヴィは優しい口調で父をなだめるのに対し、神経質な母はおろおろするばかり。最後には父をどなりつけてしまふから、父の機嫌をますます悪くする始末。シルヴィには、母が何故そのような態度をとるのか、なかなか理解出来なかった。それは、母が多くを語らないせいもあったのだが、まずシルヴィ自身が母の気持ちに理解を示していなかったからだ。母の父への態度が優しくないことに不平を言い、母を分かつ屋と呼んだ。父の病気で一番苦しんでいるのはこの自分なのだという思い込みを持っていたのだ。だが、それらは既に誤りであった。母自身の苦悩は誰よりも深かった。それは自分が生涯を共にし

方言の本質を地域の文化として、自分の目と耳でしっかりとらえた作品です。

これまで分からなかった岩手の方言を、少しずつ理解していくことで、生活の中に新しい発見をしたり、方言のもつ優しさや温かさに気づいたりする彌佳さんの素直な感動がうまく表現されています。

優秀賞

「イルカと泳いだ夏」

徳島県鳴門教育大学学校教育学部附属小三年 橋倉健太

イルカと過ごした楽しい夏の思い出が、表現力豊かに描かれています。初めてイルカに触れたときの驚きや、一緒に泳いだときの喜びが、まっすぐ伝わってくる作品です。さらに、泳いだあとの健太君の夢が、楽しい気持ちにさせてくれます。

「わが家の畑生活」

山梨県大月市立猿橋小四年 河西真央

畑を借りてからのお父さんとお母さんの変化を、うまくとらえた作品です。「どすつと足をひらいて、ぐびぐびと一気に飲みほすのです」など、真央さんらしいユーモラスな表現が随所に見られ、作品を一層盛り上げています。

「プレゼントを買いに」

愛知県豊橋市立大村小五年 田井中宏文

「お母さんにプレゼントを買いに」という宏文君の強い意志と、プレゼントを手に入れるまでの「はらはら」や「どきどき」が、とてもよく伝わってきます。プレゼントを渡したときのお母さんの喜ぶ顔が目につくようです。

「私の進む道について思うこと」

岐阜県久瀬村立久瀬中三年 高橋千秋

誰もが一度は考えるであろう自分の進路について、千秋さんはピアノを引くピアノの姿と自分を重ねて考えています。ピアノに対する深い思いと、自分の将来は自分で切り開いていこうとする千秋さんの決意が、力強く表現されています。

ようにした人が全く別人に変貌していく姿を見続けなければならなかったからだ。夫にがみがみ言うのも、そうすれば昔の夫を呼び戻せるかもしれないというわずかな望みからだ。本当は母も叫んでいたに違いない。「わたしを置いていかないで！」と。

私はこの場面を読んで、深く考えさせられた。私もシルヴィのように自分の価値観だけで人を判断し、それが原因で誤解を生み出したことはなかったろうか。他の誰かの気持ちを感じ取ってあげられること、これは私達人間が他の生物に比してより多く与えられた能力である。それなのに自分の価値観が大きな壁となり、心の窓を固く閉ざしているようでは意思の疎通は望めない。折角の能力を台無しにしていることになる。その典型的なパターンが「先入観」である。相手をまだよく知り得ない段階で、自分に都合のよいように解釈し、それを固定観念として潜在意識の中に植えつける。この状況ではその人と永遠に分かり合うことも、手を取り合うことも不可能だ。

私は今までの人生の中で多くの人々と出会った。自分では気付かず本当のその人の姿を理解できないまま別れた場合もあると思う。「気持ち」を伝え合うことが私達を真の人間にするならば、あくまでも判断の基準は自分にあるという傲慢さは許されない。人間であり続けるために、私は相手の気持ちをそのまま感じ取りたい。ちよと、相手の投げた心のボールを素手で受けとめる要領で。

シルヴィから学んだことはもう一つある。それは困難な状況下にあっても運命を変えようと立ち向かう姿勢を持ち続けることである。父の病氣は完治することはないが、最後まで希望は捨てなかった。生きる気力を呼び戻そうとしてあらゆる手段を尽くしたのだ。その理由について暗中模索した結果、私は一つの結論に到達した。それは、未来は現在からは見えないということだ。まだ見えてもいない段階で諦めるのは早すぎる。むしろ、未

来を自分の力で支配しようと考えてるべきではないか。未来は無数の可能性の集合体である。今、私達の行為のひとつひとつが「可能性」という種を蒔いているのである。だが、蒔いた種の全てが都合よく開花するとは限らない。当然ながら不都合な種からは美しい花は期待できない。そのまま放置しておけば、悪い種が芽生え、未来が悪い方向へと導かれることも有り得る。それを未然に防止するために、良い種を芽吹かせよう、未来を掌握しよう、彼女は努力したのである。

私もこれから、シルヴィに負けないくらい精いっぱい「努力と挑戦」をして生きていきたい。いつの日にか、その未来が現在に一致したとき、辺り一面に満開の花畑が広がる光景を心の糧としながら。

文章全体の構成がしっかりしています。本の内容をていねいに読み取ったうえで、自分の感じたことを表現している点が光っています。

シルヴィの生きる姿勢を自分の生活に生かしたいという決意で締めくくられていますが、客観的な読み取りで終わってもよかったですのではないかと思います。

優秀賞

「いてくれるだけでいい人」

東京都港区立白金小二年 高塚悠平

「いてくれるだけでいい人」という題名がびつかりの作品です。本の中の「おばあちゃん」や自分のひいおばあちゃんのように、「いいだけでいい」ような、あたたかい人間になれたらすばらしい、という悠平君の気持ちに感動を覚えます。

「かぎりなくやさしい花々」を読んで

兵庫県愛徳学園小五年 宮内晴加

この本を読んでから「前とは物の見方や考え方が少し変わってき

た」と書いています。読書を通して、今まで気づけなかったことに気づくようになった喜びを、晴加さん自身が強く感じていることが伝わってきます。

「妻は幸せだったのか」

大阪府大阪教育大学教育学部附属天王寺中二年 澤田育子

この小説を「おもい」という母の言葉を手がかりにして、嫁と姑の、他人にはわからない壮絶な戦いを、二人の心理に迫ってよく書かれています。ただ、作者の解説に引きずられて書いているところが見られるのが残念です。

その他の受賞作品 作文部門

- ◆優良賞 「えちぜんやきおや子とうげいきょうしつ」(福井大学教育学部附属小一年) 山崎二美馨 「トマトのひみつ」(大垣市立興文小一年) 宇津あや子 「お母さんの自まんの日記」(愛徳学園小四年) 平山沙織里 「耳が聞こえるようになった」(名護市立東江小五年) 洲鎌つき 「夢を追いかけて」(前橋市立芳賀中二年) 林友里 ◆佳作 「おじいちゃんおじいちゃん」(高松市立横紙小一年) 蜂須賀亮佑 「コイのマックス」(市川市立中山小三年) 小松琢磨 「お父さんが帰ってくるよ」(川島町立川島小三年) 横沢佑太 「お母さんの仕事」(豊田市立九久平小四年) 山下将輝 「はくとひまわり号」(神戸大学発達科学部附属明石小四年) 喜多山太 「震災に負けない神戸」(愛徳学園小五年) 上根彩 「私から渡す母への元氣葉」(愛徳学園小五年) 小林真依子 「おんたけ山」(愛徳学園小六年) 木村みどり 「おじいちゃん」(笑顔) (高松市立太田小六年) 高橋香奈 「憧れのドイッ・シュツットガルト」(大垣市立星和中二年) 清水寛司

読書感想文部門

- ◆優良賞 「天国のゆずちゃんきこえる？」(文京区立千駄木小一年) 山根央理 「わたし、五等になりたい」(土佐市立高岡第一小三年) 森澤雅美 「きみはタックス先生がきらいか」(読んで) (星美学園小四年) 神保祥子 「おじいちゃん」(星美学園小四年) 長谷川恵美 「雪原で見つけたもの」(オロシャ雪原の逃亡者) (八戸聖ウエルスラ学院小六年) 森田美奈子 ◆佳作 「麻衣子の家族と出会う」(千葉大学教育学部附属小六年) 角野愛 ◆佳作 「ゆずちゃん」(大阪教育大学教育学部附属天王寺小一年) 駒井那帆 「ぼくがもらったおくりもの」(栃木市立大宮北小二年) 中村龍一 「かあちゃんかきく」(大垣市立中川小四年) 吉田久美子 「さよならの日のねずみ花火」(星美学園小四年) 林絵梨香 「ありがと、律ちゃん」(大垣市立中川小四年) 清水理絵 「銀色ラッコのなみだ」(賢明学園小五年) 宮地優佳 「ステファニー」(鳥取市立立進小六年) 谷本香葉 「エリットルの涙」(岡崎市立常盤中一年) 柴田沙希 「暖かな家族の中で」(大阪教育大学教育学部附属天王寺中一年) 木村雅子 (豊臣秀長) (泉南市立信達中二年) 大谷峰世